

# 説明的な文章の指導への一考察

— 考えることと書くことと —

畑 実

## I. はじめに

ここで説明的な文章というのは、指導要領の「現代国語」の読むことに示された、「説明、論説、評論などを読む。」をさすものであり、もっといえば、論説的な文章をさす。「論説的な」というのは、実際の教材では、説明・論説・評論のいずれともきめがたいものが多いからであり、ここで取りあげる教材が三つあって、おのおの違うからである。

国語科における4領域である、聞くこと・話すこと・読むこと・書くことは、単元ないしは教材に応じ、いずれかに重点がおかれるべきことはもちろんであり、また、高等学校においては読解に重点がおかれる。このことは、聞くこと・話すこと・書くことを軽視していいということの意味しない。指導要領に、「聞くこと・話すこと・読むこと・書くことの学習は、相互に関連させて、有機的に指導し、片寄りのないようにすることが必要である。」と述べているのは、読解に片寄らないようにという留意事項ではあるが、4領域の併用がむしろ読解を深めるといのが、私の持論である。ここでは紙数の関係から、論説的な文章の取扱いの一端にふれたい。とくに「考えることと書くこと」ということに関して。

## II. 指導の実際

A. 論説的な文章について指導する事項は、指導要領に示された、「イ. 文章を読んで、主題や要旨をつかみ、また、人生や社会の問題について考えを深めること。カ. 文章の論理的な構成を理解し、論拠を明らかにしながら、その論旨をつかむこと。」であろう。私のとる一般的な指導過程としては、論理的な構成を理解し、論拠を明らかにして、論旨(要旨)をつかみ、人生や社会等の問題について考えを深めさせる、という方法である。

私はどの教材でも必ずといってよいほど、字数を制限して要旨を書かせることにしている。これは教科書に書き込んだりしてノートを持たない生徒をなくすための副次的目的を果たすことにもなるが、また、時々

ノートを点検するので、ノートのとり方指導の一助にもなっている。要旨をまとめるためには、要旨を的確につかんでいなければならない。また、文章にまとめることにより、要旨の把握が深められるということにもなる。また、制限された字数にまとめるためには、簡潔で筋の通った文章を書く力がなければならない。これは作文力を練る絶好の機会でもある。これは、作文指導にとって最も根本的な、書く必要の場にたたせることになる。ここに、標題の副題に示した、「考えることと書くこと」の第1次階梯があるのである。次に、時間をきめて書かせた要旨を、口頭で発表させる。7, 8人発表させ、だれのが一番よいかをきいてみる。数人やれば適当な答が出るものである。2, 3のいい例を示し、うまく書けなかった生徒にその文章を訂正させる。

次に、そのようにしてその単元のすべての教材を終えた後、その単元全体についての話し合いをさせるか、感想・批評等を書かせるかする。各教材についての取扱いによって、論理的な構成を理解し、論拠を明らかにして要旨をつかませようとし、単元全体についての話し合いや感想等を書かせることは、人生や社会等の問題について考えさせようとするものである。そして、書かせる場合は、「考えることと書くこと」の第2次階梯に当たる。これは、前にもふれたように、深い読みとりがなければできないことであり、また、文章に書き表わすことによって、より読解が深められるのである。そして、第1次階梯より、より広く、より深い読解を必要とし、より高い作文力を必要とする。そして、より深く考えることになるのである。

B. 以下、高1の指導の実例について述べたい。

1. 教材は、高島善哉の「現代文明と人間疎外」、野村実の「人間シュヴァイツァー」、夏目漱石の「私の個人主義」である。紙数の関係で全文が掲載できないので、その要約だけ示そう。

高島善哉の「現代文明と人間疎外」は文明批評ともいうべき論理的な文章である。すなわち、人間が人間として扱われなくなる人間の機械化、人間がその主体性や人格性を失う人間の自己疎外、これらの現象を一括

して人間疎外と呼ぶが、この現象は、文明進歩がもたらした機械文明・合理主義的文明の爛熟した近代企業の社会においては、必然的に見られるものであり、不可避なものであるといえる。この意味から、ドイツのロマン主義者やイギリスの文明批評家たちは、「人間は文明の進歩につれて墮落するものだ」という悲観説をとらえ、近代文明の弱点を強く指摘している。しかし、それは近代文明の一側面は突いていても、現代の人間を救うことにはならない。そこで、われわれは人間の進歩と社会のメカニズムとの関係の正しい理解のうえにたつて、現在、ノイローゼ化している「人間疎外」の問題から脱出する方法を考えるべきである。その方法として次の二つがあげられる。(1)人間のメカニズム化を強制する生活の時間をできるだけ短縮する。そしてレクリエーションを充実させる。(2)仕事そのものを自己目的であるように考える。ともかく、われわれは組織やメカニズムを巨大な楽園としていく方法の考察、そして努力、ここに現代の人間の生きる道がある。

野村実の「人間シュヴァイツァー」はいわば伝記であり、世記の偉人、現代の聖者と呼ばれるシュヴァイツァー博士の生涯と思想を、その最も根本的な面から論述し、紹介したものである。すなわち、学者として、音楽家として、十分な天才を発揮して半生を過ごした後、赤道アフリカの黒人のために医師として奉仕することを天職と感じ、苦しい準備期間の後に、すべての地位や名誉をなげってアフリカに赴いたシュヴァイツァー博士が、現代の文化の矛盾を解決する道について深い思索を続けた末、遂に「生命の畏敬」という思想に到着するに到った過程を感動的に述べたものである。

夏目漱石の「私の個人主義」は講演である。漱石は大学時代から卒業後の十年近い間、文学と人生にわたる根本問題について懷疑し煩悶したあげく、ロンドンの下宿で自己本位の立場をようやく確立した。それは「自己が主で他は賓であるという信念」に基づくものであり、しかも他の自我をも尊重する立場であった。個性的、主体的であるとともに、普遍的、社会的であることを失ってはならぬのである。すなわち、この論理の帰結である「私の個人主義」とは、「他の存在を尊敬すると同時に自分の存在を尊敬するという」道義と人格の高揚された主張にほかならない。

2. 上述の3教材について、それぞれの終結に、200字で要旨を書かせた。当然のこととはいえ、教材によって要旨をつかむのに難易があった。「私の個人主義」では、書かれた文章から判断して、2%が要旨がつかめず、25%が不完全な要旨のつかみ方であり、73%が要旨をつかんでいた。他の2教材については、正確に

調べなかったが、ノートを読みあげさせた7~8名の生徒のうち、半数近くが不得要領の書き方をしていた。

「私の個人主義」については黙読するだけですませ、他の2教材は相当詳しく取扱ったはずであるのに、このような数字が出るとは、教材の難易度にもよるだろうが、いろいろのことを考えさせた。すなわち、内容・要旨を理解しつかんでいても表現がまずいのか、もしそうだとすれば、作文指導にもっともっと力を入れなければならないことになる。内容・要旨の理解や把握ができていない生徒が多数いると考えられるならば、私の指導法のまずさを露呈したことになり、その指導法を反省しなくてはなるまい。また、生徒に、じっくりと考えて読むという態度・習慣が欠けていることもそれに輪をかけているとすれば、この方面の訓練もたいせつになる。これは上述したように、書かせることによって考えることを深めもするが、平素の読書その他の生活にも関係するところが大きい。

3. 次に、三つの教材に関する感想・批評を書かせた。すなわち、前2教材を相当時間かけて終えた次の時間に、「私の個人主義」を黙読させた後で、(1)この文章の要旨を200字にまとめよ、(2)「現代文明と人間疎外」、「人間シュヴァイツァー」、「私の個人主義」を読んで考えることを書け、という課題を出した。1時間だけでは終るはずもなかったので、家庭作業にして後日提出させた。

その(2)をまとめた結果は次の通りである。

ア. その書き方は三つの型に分けられる。その1は、三つの文章を関連づけずに別々にその内容を述べ、それぞれに対する感想を述べている。その感想も簡単で、また観念的に肯定したものが多く、たとえば、シュヴァイツァーは偉いと思う、夏目漱石のように他人を尊重しなければならない、といったたぐいである。概して国語の成績の低いものがこの型に属する。その2は、a. 三つの文章を関連づけてそれを肯定し、もしくはそれに共鳴するといったものと、b. 三つの文章を関連づけてそれを批評するといったものとの二つを含む型である。これに属するものとしては、中位の生徒もしくは上位の生徒が多い。その3は、三つの文章を関連づけてそれを批評し、さらに別のことに発展して自分の考えを述べるといった型である。これに属するものは上位の生徒である。

イ. 内容的には多種多様であるが、比較的数の多かったいくつかの例をあげてみよう。

○今まで考えてもみなかったことを改めて考えさせられた思いで、いろいろのことを考えさせられた、という書き出しでペンを進めたものが多かった。

○人間の機械化、人間の自己疎外は現代社会では避け

られないものであり、悲しいことであるが、それを救うには生命を畏敬し、他人のことも考えた自己本位の利己主義ないしは主体性の確立が必要である。それがまた文化を向上させるものである。

○人間の機械化、人間の自己疎外というようなことを自覚する人間はいない、それほど忙しい世の中である。自分という歯車がなければ機械が止まってしまうのだという自覚、自分の仕事に対する誇りをもっておれば、自己疎外などということは問題にならない。

○機械化され、自己疎外を余儀なくされる現代は、考える力を失っている。また夢を失っている。現代をよりよくするには、もっと考えること、あるいは考える力をつけること、もっと夢をもつことがたいせつである。ただし他人のことを忘れてはならないことはもちろんである。

○シュヴァイツァーは偉い。ただ頭の下る 思いである。

○シュヴァイツァーは偉いと思う。りっぱだと思ふ。しかし程遠い存在である。

○シュヴァイツァーは偉いことは偉いと思うが、しかしばかなことをしたものだとも思う、自分は満足だっただろうが、妻がかわいそうである。せつかく築いた名声を棒にふったその心が理解できない。シュヴァイツァーの言動には疑問に思う点が多々ある。

○生命の畏敬ということはりっぱなことであるが、それを正当化するのはいくつかない。他のために自己を犠牲にすることは生命の畏敬にならない。

○世界には未開発地域がまだまだある。そこでは人間疎外のようなことは問題にならない、もっともっとそういう地域に進出して働くべきである。

○シュヴァイツァーに 180 度の転換をさせた根底には宗教がある、宗教の力のかくも偉大なものであることに心をうたれた。

○夏目漱石はわれわれに希望をもたせた。自分に適する、一生をかけるに値する仕事をみつけて進むべきである。そしてそれを待ってはいけぬ。積極的にそれを求め、努めるべきである。

### Ⅲ. ま と め

「考えることと書くこと」をめざした、論説的な文章の取扱いはいろいろの点で意義がある。とくに第 2 次の階梯におけるそれは、いくつかのことを示唆している。まず、「文章の論理的な構成を理解し、論拠を明らかにしながら、その論旨をつかませること」、  
「文章を読んで、主題や要旨をつかみ、また、人生や社会の問題について考えさせること」において、有効な方法であることを示した。生徒の書いたもの内容

のよしあし、考え方の不当は別として、これだけの文章を書くということは、三つの文章を理解し要旨をつかんでいるとみることができるところからである。また、その考え方にはいろいろと批判されるべきものがあるにしても、人生や社会の問題について、真剣に考えたあとがうかがえるからである。とくに、前向きの、建設的な意見が相当出ているという点において、また鋭い批判もむけているという点においてはなおさらである。

第二に、作文指導のいい機会になった。前にもふれたように、作文では書く必要の場に立たせることがたいせつであるが、「主題や要旨が明確に表わされるように、全体を論理的に効果的に構成して書くこと」の必要に立たせたわけである。また、提出させることは評価されるという意識も手伝って、いいかげんに書かせなかったことも見逃せない。

かくして、論説的な文章の指導において、考えることと書くこととの結合は、大きな意味をもつものである。

最後に、一編だけ生徒の文章を示してこの稿を終えたい。

#### ○私の考えること 高1女

現代文明の流れの中で人間は機械化されつつある。一から十まで機械に頼る傾向にある現在、人間は感情も何もたない「物体」に化してしまうのである。

考えただけで身ぶるいのするようなこの現実の人間は「考える葦」であつたはずなのにロボットのごとくあやつられることしかせず現代人は生きている。「個人」などということばは情容赦もなく忘れ去られ誰にも他人のことなんか心配しているひまはない。まして「生命の畏敬」などを唱えている人がいたら顔を拝みたいようなご時世になってしまい、そんな時間が少しでもあつたら自分が次にあやつられるべき新しい機械の発明にいそむ。これが現代文明といわれるべきものなのだろうか。

人間が機械を作り、その機械が人間をその一部としてしまう。人間は自分で自分の首をしめているのと同じである。しかしそれは文明の流れと常に背中合わせなのかもしれない。

私はまだ本当に現実のきびしさを経験したことはない。しかし私は知っている。父だってやはり家から一步外に出れば機械となっていることを。私の前にはもっときびしい現実が待っていることを。今、机を並べている彼も彼女ももちろん私だっていずれは同様に機械と化してしまうことを。私はこんな世の中に反発を感じる。しかし私ひとりが大声でわめいてみたところでどうなるというのだろうか。今ここに、人間を、個人を、生命をとり戻そうとするなら、文明もまたスト

## 説明的な文章の指導への一考察

ップしてしまうからである。しかし今、そんな私の心に小さな夢が生まれた。

どんなにきびしい現実の中に立たされても私だけは常に「個人」というものをみつめていてやろう、そしていつかお金とひまができれば人間のいない、もちろ

ん機械なんかひとつもない所へ行って、「生きている」という事実をかみしめてみたい。我が愛する人と共に——そんなことを空想しながら、やはり私は現代文明の中に生きている。